

財団法人 山の暮らし再生機構 の取り組み

福祉社会開発研究センタープロジェクト2
地域産業グループ研究員
財団法人山の暮らし再生機構上席スタッフ
佐々木康彦

1. 財団の設立の経緯

山の暮らし再生機構（以下、LIMO：Life in Motherlandとする）は、平成19年4月に新潟県中越地震において甚大な被害を受けた中山間地域の創造的復興に向けた中間支援組織として設立された財団法人である。

被災した中山間地域が地震後3年を経て復旧から復興へと移行しつつある中で、従来から抱えていた農業の衰退、人口減少、集落機能維持などの問題が地震によって一気に顕在化してきた。今後の復興活動では、災害からの復興のみでなく持続可能な中山間地域の形成；創造的復興を推し進める必要がある。

このような流れの中でLIMOではこの創造的復興に向けた活動展開を全国の中山間地域全体の再生に向けたひとつの出発点として捉えて支援活動を進めている。その支援方針は住民の地域に対する醸成する「中山間地域の新たな魅力の創出」、中山間地域発の人材を輩出する「生きる力を育む学びの場の創出」、そして都市と中山間地域とのWin-Winの関係を構築する「自然と経済の循環型ネットワークの創出」の3つテーマと掲げ、産官学民の多様な主体の連携を促進し「人」と「情報」が出会うプラットフォームとしての役割を果たすこととしている。

また、LIMOの組織としての大きな特徴は、10年間という時限付の組織として設立されたことだ。10年の間に多様な復興活動を支援しながら創造的復興に向けた一定の流れを実現するための支援を行い、その活動期

間が終わった後に、これまで果たして来た中間支援組織としての役割が地元住民、市民団体、地域内外の企業や教育機関などの連携・協働によって引き継がれていくことが出来る仕組みを目指している。

2. LIMOが実施する支援活動

LIMOではこの1年間で原則的には自ら事業を行うのではなく中間支援組織として、地域の内発的な活動の種まき、地域資源のPR・プロモーション、国・県・市施策との調整、助成金等の情報提供などの支援をプラットフォームとして行って来た。その結果、住民、NPO、民間事業者、行政など多様な主体がLIMOというプラットフォームの上で連携することで、いくつかの動きが生まれてきている。ここでは、以下にその活動の一部をLIMOが行ってきた支援機能に分けて紹介する。



写真1 参加者によるワークショップ風景

サポート機能：

創造的復興に向けて何か始めたい或いは既に始めている個人、団体に対して事業の実現に向けてのスキーム作り及び専門家派遣、他の主体との連携及び協働を推進する。

(1) 学校の森事業

財団法人ユネスコアジア文化センター、NPO学校の森など連携し、ACCU国際教育交流事業プログラム「持続可能な10年ホリスティックアプローチ」のなかで、長岡が発祥の地である学校の森の公開フォーラムを開催した。

学校の森づくりの端緒は、都市環境の中にある学校で自然とのふれあいや地域社会との「つながり」の希薄さを埋め、教育再生と地域再生の場として学校や文化施設に地域住民と一緒に手作りの雑木林が作られたことである。

フォーラムでは、最初の森が作られた長岡市立川崎小学校での森を活用した教育の体験をはじめとし山古志での視察も組み込みワークショップを行った。フォーラムには国内外から約100名が参加し、持続可能な教育における森とのふれあいの重要性について議論された。

(2) インディペンデンスボードウォーク

山古志ボードウォーク推進委員会が推進する障害者が自分の意思と力で森林を楽しむことができる木道づくり活動の支援を行った。ボード設置の推進委員会とともにボード設置の企画からかわり、設置場所の選定、新潟森林組合とのマッチング、ボランティアとの連携など多様な支援活動を行った。

ボードウォークは、山古志のなかでも最も歴史の深い池谷闘牛場に設置することとなった。平成19年度の設置距離は約80mで観客席の周りを囲むようにし、ボード上からも闘牛を観戦できるような配置とした。

また、地元新聞社である新潟日報と連携することで対外的なアピールも活発に行った。平成19年9月16日の



写真2 住民による施工風景



写真3 完成後の様子

闘牛大会にあわせてお披露目会を開催し、闘牛大会の参加者は木道の上に腰掛け闘牛を楽しむ風景が見られた。

平成20年の雪解け以降も、今後地元推進委員会が中心となり、木道を伸ばす活動が進められる。

コミュニケーション機能：

地域ごとに行われてきた活動同士の地縁型連携促進、また、それぞれの主体が持つニーズをマッチングさせ新たなテーマ型連携促進を行う。

(1) 夜楽塾

復興関係者や山の暮らしに興味のある方などが、自由な意見交換・情報交換を行う場としてLIMOサロンを活用している。参加者は地域住民、NPO職員、マスコミ関係者、周辺自治体職員など多様である。山古志からの参加者も多い。違う立場の参加者が同じテーブルを囲みお酒を交わしながら、各々が今取り組んでいる



写真4 夜学塾の様子

活動について自由に議論をすると共に、多様な交流関係を構築するきっかけとなっている。

また、第2回目には建築家の三谷克人氏を招き、オーストリアやその周辺諸国で行われている農村振興施策などを紹介し意見交換を行うなどテーマを絞った議論も行った。

(2) 出前講座

まちづくりや地域おこしの専門家や実践者を講師として招き、住民が参加しやすい講座内容で復興活動の最初の一步を踏み出すきっかけづくりを行うことを目的として開催した。

全5回の講座を、問題提起から事例紹介、総括という連続シリーズ形式とし、参加者をリピーターとして次回の講座へ参加してもらおう形をとっている。ただし、途中参加者が入れるように1回1回の内容は完結し、途中参加者も受け入れることができるものとする。5回の講座は中越地域内の別会場で行い、地域間の住民連携強化も促している。



写真5 夜「出前講座 in 川口」の様子

プロモーション機能：

中越の中山間地域の魅力・地域資源を育成すると同時に、住民の地域に対する誇りを育成する。また、それらの魅力・資源のPRを都市部を中心として実施し、中越復興ブランドの確立を目指す。

(1) 台湾文具・ギフト見本市

新潟産業創造機構が推進する国際文具・ギフト見本市にて、県内の産品と供に山古志の錦鯉と中越地震からの復興活動のアピールを行った。錦鯉のマーケットは国内のみならず海外に広く広がっており、山古志の養鯉業者でも海外との取引を主にしている業者もある。現状の錦鯉の台湾への輸出はあまり大きなマーケットがなく、今後の拡大が大きく期待される。

また、台湾では地震についての関心も深く中越自身についての質問も多く寄せられた。地震と合わせた産業のPRを今後も続けていきたい。



写真4 台湾見本市ブースの様子

(2) 川口物産展

中越大震災・中越沖地震の復興記念として開催された「えちご川口物産展」へ地域の特産物の出展を実施した。各地域から販売したい商品を集め、住民にも販売ブースに立ってもらい直売を体験してもらった。自分達がつけている商品がどのように売れていくのか、買った人がどのような評価をするのかを体験してもらうことで、自分達の集落がもつ地域資源の可能性の認識を促している。



写真7 物産展の様子

山の暮らし大学校育成事業

中山間地域を学びの場・交流の場と捉え、(1)都市と農村の共生・対流の拡大、(2)持続可能な集落づくり、(3)エリア・アイデンティティや地域ブランドの形成、(4)UIJターンの活性化、(5)地域の活性化、など中山間地域からの日本の活性化を図ることを目的とし、山の暮らし大学校の設立準備を行っている。

山の暮らし大学校は、「山の暮らし」のゲートとして、中山間地域で脈々と受け継がれてきた「自然と共に暮らす知恵」の中に、循環型社会構造のモデルとなるヒント、「学ぶべきもの」が内包していると考える。

それらに価値を与え、それらを伝えたい、学びたいと思うひとや組織が「地の知の創発の場」である中越地域に集い、学びと交流を通して夢を語り合い、新たな価値観を創発・共発し、具体的に表現する足がかりの場を目指す大学校としたい。

平成21年度の一部開校をめざし、平成19年度は学識経験者や専門家を集めた勉強会、ワーキンググループを設置し設立に向けた協議を行っている。

(財)山の暮らし再生機構

〒940-0062 新潟県長岡市大手通1-4-11

TEL : 0258-30-1213 FAX : 0258-30-1205

e-mail : info@yamanokurashi.jp URL : http://yamanokurashi.jp